

高齢期におけるパーソナリティ特性と適応方略の関連について

角田 百穂

本研究の目的は、高齢者を対象に、パーソナリティ特性と適応方略の関連を検討し、パーソナリティ特性の違いによる適応方略の選好を明らかにすることである。年齢を重ねると、喪失や制約が増え、資源が減少し、能動的な適応方略である 1 次コントロールを利用しても目標の達成が困難になり、統制感を感じづらくなる。加齢に伴い、1 次コントロールの利用は減少傾向になり、補完的に 2 次コントロールの利用が促進される(Brandtstädter et al., 1993; Thompson et al., 1998)。理論的に仮定されている加齢という生物学的要因による資源の減弱によって適応方略の利用が異なるが、その個人差も大きくなると考えられる。したがって、高齢期は、パーソナリティ特性によるコントロール利用の選好の違いを検討するには最適な年齢であると考えた。

1 次コントロールは、自分の目標を達成するために他者や環境、自身の行動を変化させる方略であり、2 次コントロールは、環境に適応するために自己の期待や目標、態度、解釈を変化させる方略である(Weisz et al., 1984)。適応は 1 次コントロールと 2 次コントロールの調整による環境への最適化であり、ヒト個人の持つ統制感によって利用傾向が異なり、統制感が大きい人は 1 次コントロールのみを利用しやすく、統制感が小さくなると輻輳的に 2 次コントロールが用いられやすくなる(Rothbaum et al., 1982)。様々な適応方略には、統制感が自己の内部にあるという共通点があり、適応方略を利用する際の態度の違いによって分類できる。

ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性(Big five personality trait)とは、神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性によって構成されており、比較的保たれた思考、感情、行動様式であり、ある状況における反応の傾向を反映している(Roberts, 2009; 小塩, 2012)。

研究 1 では、1 次コントロールの一つである SOC の利用傾向を測定する質問紙の信頼性の検討を行った。ES を測定する 3 項目を除外し、9 項目からなる十分な信頼性がある一因子構造の尺度が得られた。「SOC 利用傾向尺度」と名付けたこの尺度は、尺度得点の高さが SOC の利用傾向の高さを表す。

研究 2 では、2 次コントロールの一つであるポジティブ優位性効果を基にした既存の尺度に新たな 4 項目を追加した合計 8 項目の尺度の信頼性の検討を行った。各因子 3 項目の二因子構造の十分な信頼性がある尺度が結果として得られ、より内的整合性の高い尺度となった。既存の尺度の項目は積極的ポジティブ傾向因子となり、平時における肯定的感情を高める方略を意味し、新たに追加した項目は、状況依存的ポジティブ傾向因子となり、非常時における肯定的感情を高める方略を意味する。「ポジティブ傾向尺度」と名付け、尺度得点の高さがポジティブ優位性の強さを表し、適応方略としてポジティブ優位性を発揮している程度を計測することができる尺度となった。

研究 3 では、研究 1 と研究 2 で十分な妥当性を有すると判断した適応方略の利用傾向を測定する 2 つの尺度を利用して、パーソナリティ特性と適応方略利用の関連を検討した。各パーソナリティ特性とそれぞれの適応方略には統計的に有意な相関があるという結果が得られ、神経症傾向の高さによって適応方略の利用が回避され、誠実性の高さによって適応方略、特に 1 次コントロールを利用しやすいことが明らかとなった。さらに、外向性が高いとポジティブ傾向を利用しやすく、開放性の高さは適応方略の違いに関わらず適応方略の利用を促進することが示された。一方で、調和性は、適応方略との相関が小さく、適応方略の利用に対する予測因子とならなかった。本研究によって、パーソナリティ特性による適応方略の利用の選好が示唆された。(臨床死生学・老年行動学)